

調査データで見る現代の四国遍路 一繁多寺での質問紙調査より

竹川 郁雄(愛媛大学法文学部教授)

Modern-day Shikoku pilgrimage as seen through fieldwork data**- A questionnaire survey at Hantaji.****Ikuo TAKEKAWA****Professor, Faculty of Laws and Letters, Ehime University**

This research attempts to clarify various aspects of people making the Shikoku pilgrimage and the actual conditions of modern-day Shikoku pilgrimage. In order to do this, visitors to Temple no. 50, Hantaji were asked to complete a questionnaire. This survey has been conducted in about the same location six to seven times for six times between 2006 and 2016. The total number of valid responses after this sixth survey is 5116 and one point that has been made apparent is that the Shikoku pilgrimage is becoming diversified through the development and expansion of religion becoming more of a personal matter. This means that religion is gradually losing its influence from the public sphere such as through political and regional events, and that each individual is treating religion more as a private matter. From the points seen in the data of previous questionnaire surveys, we can point out the following characteristics.

- 1) There has been an increase of people doing part of the pilgrimage rather than the whole based on the amount of time available and physical condition.
- 2) More people are making the pilgrimage by car where they are free to move at their own speed rather than join a group bus tour where they have to move in a uniform manner.
- 3) More young people rather than retired elderly people are making the pilgrimage.
- 4) There is an increase of people making the pilgrimage with the purpose of sightseeing or so that a prayer/wish will come true proving a stronger belief in practical reason or "benefits of this world."
- 5) There are some people who are visiting temples imitating what they saw on a television program.

Thus, the modern-day Shikoku pilgrimage is suiting modern-day people who wish to travel freely, but it cannot be said that the pilgrimage is entirely becoming a personal matter. There are many who follow the steps of worship at each temple along the Shikoku pilgrimage route. As well, by completing the pilgrimage many times, the person's belief in Kobo Daishi deepens.

はじめに

今日四国遍路は、マスメディアによってさまざまに取り上げられ多くの関連書物が出版されているが、その実体について十分明らかにされているとはいえない状況である。本稿は、2006年より6回にわたって調査したデータを使用して、現代の四国遍路の実態と遍路をする人々の意識構造を実証的に明らかにすることを目指すものである。現代の現象を分析する方法には、量的なものと質的なものがあるが、ここでは回答された質問紙を集計したデータの量的な分析を行う。具体的には遍路する人々の人数を計測したり、質問紙に回答した情報より、その年齢層や巡拝の仕方について年度ごとの変化を分析し、年代や遍路回数の異なる人たちの状態を比較することによって考察を進める。

1 遍路する人々への目視調査

第50番札所繁多寺の山門付近で、遍路する人が札所で納経できる7時から17時まで、2011年調査(第3回目)より、質問紙調査と合わせて観察員による目視による計測を実施した。質問紙調査は遍路する人にそ

の場で依頼するので、回答を拒否される場合がある。それに対して、目視で計測した人数はその日 50 番札所を通過した人を数えるので質問紙調査を拒否した人もカウントされる。その意味で、実際の人数に近くなる。しかしながら、調査場所には遍路目的以外の人も通過するので、寺に遍路以外の所用で来ている人や本人が遍路ではなくお参りに来ていると言う人を除くことにした。ただし、多くの人が一度に通過することもありカウントするかしないかは観察員の判断によっている。

どの年も、雨天の際には質問紙や回答者が濡れて実施不能となったり、雨の中回答を拒否する者も多く現れ、途中中断または中止せざるを得ない状況となった。そのため調査実施時間を同一にすることはできなかった。2016 年は簡易テントを使用して試みたが、本降りの雨や台風の際には、実施は困難であった。

表 1 2011 年調査（雨天により 3 月 20 日は 14 時まで、3 月 21 日、24 日は中止）

2011年3月	17日(木)	18日(金)	19日(土)	20日(日)	22日(火)	23日(水)	25日(金)	合計
男性	96	72	173	148	55	63	97	704
女性	74	74	205	149	52	76	123	753
人の合計	170	146	378	297	107	139	220	1,457
車	52	32	106	102	56	25	35	408
バス	4	4	5	4	0	3	7	27

目視調査の集計結果を見てみると、2011 年では、2014 年以降と比べて遍路する人の数は少ない。数的には 2011 年の質問紙調査がそれまでの 2006 年や 2007 年の数値に近く、従って 2014 年以降が増加したのであろう。表 1 より 1 日に訪れる遍路者は 107 人から 378 人まで 3 倍以上の開きである。男女の違いは 1 日の差で最大 32 人（14 日）となっており、これはバス利用に女性が多くバスの台数に左右されるためと考えられる。車も人も平日に少なく、土曜日曜は多い。

表 2 2014 年調査（雨天により 20 日は 4 時間のみ、22 日は 5 時間のみ）

2014年9月	17日(水)	18日(木)	19日(金)	20日(土)	21日(日)	22日(月)	23日(火)祝日	合計
男性	151	284	115	81	308	71	203	1,213
女性	153	365	147	77	354	72	197	1,365
人の合計	304	649	262	158	662	143	400	2,578
車	109	150	70	75	246	49	110	809
バス	8	11	3	0	5	0	2	29

2014 年において、人の合計では 4 回の調査の中で最も多い 2578 人となっている。バスの台数が多いほど女性の人数が多くなっており、男女の差が最も大きいのはバスが 11 台来た 18 日の 81 人である。21 日は 662 人の人が訪れ、4 回の調査の中で最も多い日となっている。最も多い日（21 日）と最も少ない日（22 日）では、人の差が 519 人で 4 倍以上の開きがある。

表 3 2015 年調査（雨天により 17 日は中止）

2015年9月	16日(水)	18日(金)	19日(土)	20日(日)	21日(月)祝日	22日(火)祝日	合計
男性	107	64	119	243	354	307	1,194
女性	121	42	129	214	292	290	1,088
人の合計	228	106	248	457	646	597	2,282
車	55	45	111	216	271	211	909
バス	3	1	2	1	1	1	9

2015 年では、人の合計が多い日は 646 人（21 日）、少ない日は 106 人（18 日）で、6 倍以上の開きとなっている。これまで、各調査年の総計で女性の方が多かったのだが、この年よりわずかが男性の方が多くなっている。車では、271 台（21 日、祝日）が 6 回の調査の中で最も多くなっている。車が最も少ない 18 日との差は 226 台で 6 倍の開きである。また、この年よりバスの台数が大幅に減っている。2014 年から 1 年しか経っていないが、20 台の差が出ている。

2016 年では、男性の人数が女性よりわずかに多く、2015 年の逆転を引き継いでいる。2015 年と同じく、バスの台数が 13 台と減っているためであろう。車の数を見てみると、他の年よりも 1 日あたりの台数が多くなっている。2014 年や 2015 年と比較して、平日に車が増えている。

表4 2016年調査（雨天により18日は14時まで、20日は台風のため中止）

2016年9月	17日(土)	18日(日)	19日(月)祝日	21日(水)	22日(木)祝日	24日(金)	合計
男性	261	185	158	111	183	147	1,045
女性	241	176	144	114	197	166	1,038
人の合計	502	361	302	225	380	313	2,083
車	223	175	144	86	151	136	915
バス	0	1	5	1	4	2	13

表5 目視調査の遍路者・自動車・バス数

	2011年	2014年	2015年	2016年
実施延べ時間	67時間	59時間	59時間	57時間
実人数	1456人	2578人	2282人	2083人
60時間に換算した人数	1303.9人	2621.7人	2320.7人	2192.6人
自動車数	408台	809台	909台	915台
60時間に換算した自家用車数	365.4台	822.7台	924.4台	963.2台
バス数	27台	29台	9台	13台
60時間に換算したバス数	24.2台	29.5台	9.2台	13.7台

4回の目視調査を比較してみると、調査は雨のためすべて同じ時間実施することはできず、2011年は延べ67時間、2014年と2015年は59時間、2016年は57時間であった。そこで、1日10時間で6日間実施した分に換算した数値で見えてみると、巡拝する人の場合、2011年と比べて2014年は倍増し、その後2015年と2016年で次第に減少する傾向を示している。四国遍路開創1200年の2014年に爆発的に増え、そこから減少していくのかどうか今後の推移を見守る必要がある。自動車数に注目すると、2016年が最も多く次いで2015年となっている。

このように期間を決めて定点観測を実施してみると、巡拝者の日々の変動は非常に大きいことが分かる。人と車は、2011年と比べると2014年～2016年は倍増している。ただし、2015年よりバスの台数が減っており、今後もこの傾向が続くのか、それとも調査期間中にたまたま少なかったのか注視する必要がある。車の60時間に換算した台数に注目すると、2015年と2016年の方が2014年より多くなっており、団体で移動するバスからより自由に行動できる自家用車の方に変わってきていると判断することができそうである。

2 遍路する人々への質問紙調査

① 質問紙調査の実施について

お遍路をする人々に対して質問紙調査を実施した。調査は本人が記入するか、調査員が質問紙を読み上げその回答を記入する形で実施した。遍路する人を長時間足止めするのはよくないと考え、質問項目を抑えA4用紙おもて面1枚に限ることとし（回答時間は約2分）、質問紙は実施年ごとに若干内容を変えて実施した。

調査の実施は2006年より6回行ない、いずれもほぼ同一場所で同じ形式で行った。調査時間は遍路する人が札所を訪れて納経が可能な7時～17時までとした。調査はどの年も当初7日間の実施予定としたが、雨で継続困難なため途中で中止したり、朝から雨の日は丸1日中止とした。表6では、各回の人数を比較するため、60時間に換算した人数を掲げている。第1～3回までは調査有効数が500人前後で推移していたが、第4回目の調査において有効数が1190人とこれまでに比べて傑出して多くなった。これは、2014年が四国遍路開創1200年にあたり、多くの行事やテレビ特集が行われ、一般の人々の関心を強く引いたものと考えられる。また、調査実施日の9月18日に四国遍路先達会の全国大会が松山であり、多くの関係者がその前後に松山に来て繁多寺を訪れたためであろう。第5回目の調査においても巡拝者は多く、高野山開創1200年の年であり、四国遍路への関心が高くなっていったとみられる。第6回目の2016年は60年に一度の丙申年にあたり、この年に札所番号を逆に回る「逆打ち」をすればご利益が大きいとされており、多くの人が巡拝し1184人となった。6回の調査の回答数を合計すると5116人となった。

表6 質問紙調査の回答者数

	第1回目 2006年3月17日 より6日	第2回目 2007年9月21日 より7日	第3回目 2011年3月17日 より7日	第4回目 2014年9月17日 より7日	第5回目 2015年9月16日 より6日	第6回目 2016年9月17日 より6日
人数	461人	574人	493人	1190人	1214人	1184人
実施延べ時間	60時間	70時間	67時間	59時間	59時間	57時間
60時間に 換算した人数	461人	492人	441.5人	1210.2人	1234.6人	1246.3人

遍路する人々への目視調査の数値が調査時に繁多寺を訪れた実数を示しているとすれば、どのくらいの比率で質問紙調査に回答したか、算出することができる。その結果、2011年では33.9%、2014年では46.2%、2015年では53.2%、2016年では56.8%となり、調査を重ねるにつれて回答率が増加している。その理由として、調査員の質問紙調査への勧誘の仕方が向上したこと、拒否されることが多い団体バスによる遍路者が減少したことがあげられる。

② 遍路する人々の実態

四国遍路をする人々の年代、交通手段、通し遍路か区切り遍路かについて、調査データよりその特徴を考察する。

A 遍路する人の年代

表7 遍路する人の年代比率

	2006年	2007年	2011年	2014年	2015年	2016年
10代	0.7% (3)	0.9% (5)	2.2% (11)	0.2% (2)	1.2% (15)	0.7% (8)
20代	4.6% (21)	6.0% (34)	5.5% (27)	3.6% (43)	5.1% (61)	4.4% (52)
30代	3.3% (15)	6.5% (37)	5.5% (27)	5.5% (65)	10.1% (122)	8.4% (99)
40代	2.4% (11)	7.7% (44)	7.7% (38)	8.2% (97)	13.8% (166)	16.2% (191)
50代	11.2% (51)	22.4% (128)	15.2% (75)	17.0% (201)	19.3% (233)	25.0% (295)
60代	46.4% (211)	35.7% (204)	43.8% (216)	40.0% (473)	33.9% (409)	32.1% (378)
70代	31.4% (143)	20.7% (119)	20.1% (99)	25.5% (302)	16.2% (200)	13.2% (155)
合計	100.0% (455)	100.0% (571)	100.0% (493)	100.0% (1183)	100.0% (1206)	100.0% (1178)

年代別に見ると、中年層が増加していることが第1にあげられる。すなわち40代において、2006年の2.4%から、2016年の16.2%まで段階的に増えている。10年の間にほぼ7倍に増加している。50代においても2006年11.2%から、2016年の25.0%まで、2007年がやや突出しているが、それ以外は確実に増えている。40代と50代の中年層は、合わせて13.6%から41.2%へと大幅に増加している。

その分逆に高齢者の比率が下がり、60代と70代以上を合わせた60代以上の比率が、2006年では77.8%であったのに、2016年では45.3%と6回の調査で最も低い比率となっている。実人数で見ても、2006年では40代が11人、60代が211人であったのに対して、2016年では40代が191人、60代が378人と、40代の増加が著しい。四国遍路をする人が、定年退職した60代以上の世代からより若い世代へと広がっていることが読み取れる。

B 遍路で利用している交通手段

表8より遍路の交通手段として自家用車が大幅に増加傾向にあることがわかる。2006年は45.0%であったが、2011年から6割を超え、さらに2015年は76.1%、2016年は75.2%と、遍路する人の4分の3は自家用車を利用している。

団体バスは2014年まで2011年の14%以外20%台と安定していたが、2015年に3.7%と激減し2016年も8.8%となっている。2014年の調査期間中に29台来たバスが、2015年では9台になっており、団体バスによる遍路が減少傾向にあるのか、あるいはこの調査期間中のことだけであるのかどうか今後注目する必要があるだろう。

表8 遍路で利用している交通手段

	2006 年	2007 年	2011 年	2014 年	2015 年	2016 年
徒歩	13.2%(60)	7.3%(41)	14.3(70)	4.6%(53)	7.0%(83)	6.1%(72)
自家用車	45.0%(205)	59.5%(330)	62.1%(306)	60.6%(703)	76.1%(905)	75.2%(889)
団体バス	21.1%(96)	21.6%(120)	14.0%(69)	21.0%(244)	3.7%(44)	8.8%(104)
マイクロバス	9.4%(43)	2.1%(12)	1.8%(9)	4.9%(57)	1.8%(21)	1.2%(14)
タクシー	6.4%(29)	3.4%(19)	0.4%(2)	2.7%(31)	1.3%(16)	2.0%(24)
バス、鉄道	2.4%(11)	0.5%(3)	4.5%(22)	0.7%(8)	1.1%(13)	0.8%(9)
バイク、自転車	1.5%(7)	3.8%(21)	2.6%(13)	3.5%(41)	5.0%(60)	2.1%(25)
その他	1.1%(5)	1.6%(9)	0.4%(2)	2.1%(24)	4.0%(47)	3.8%(45)

徒歩は増えたり減ったりであるが、50 名前後で推移しており、2015 年は 83 人と 6 回の調査中最も多く、2016 年も 72 人となっており増加するきざしが見える。歩き遍路がよくマスメディアで取り上げられていることから、この人数は意外と少なく思われるかもしれない。順打ちにせよ逆打ちにせよ札所 1 番の霊山寺あるいは札所 88 番の大窪寺から多くの人が出発するので、調査地点の 50 番札所は中間的な所であり、歩き遍路から離脱した人は通過しないので、マスコミ報道に反してこのような人数になるのであろう。

他の交通手段については、自家用車が圧倒的に多いために低い比率となっている。その他には、レンタカー利用が含まれ、タクシーとバス・鉄道利用など複数利用するものも含まれている。

C 通し遍路か区切り遍路か

表9 通し遍路か区切り遍路か

	2006 年	2007 年	2011 年	2014 年	2015 年	2016 年
通し遍路	32.8%(149)	23.0%(133)	25.7%(122)	16.6%(181)	10.7%(124)	12.3%(141)
区切り遍路	67.2%(305)	77.0%(446)	74.3%(353)	83.4%(912)	89.3%(1032)	87.7%(1001)

表9より、88ヶ所を1回の巡礼で回る通し遍路が減る傾向にあることがわかる。2006 年では通し遍路が全体の約3割であったのが、2014 年からは10%台となっている。比率ではそのような傾向がうかがえるが、人数に注目すると各年で120 人から180 人の間にあり、毎年一定数の人たちが通し遍路を行っている。2014 年から2016 年に大幅に増加した人たちは、区切り遍路を行った人たちだと見ることができる。

早稲田大学の道空間研究所が1996 年に実施した調査では、通し打ち遍路は27.7%、区切り打ち遍路は71.1%となっている(1)。この調査は札所15ヶ所の宿坊を中心とした留め置き調査によるものであり、本調査とは事情が異なるが2006 年、2007 年、2011 年の結果と比較すると2000 年前後は25%前後の比率になるのではないかと考えられ、それ以後通し遍路は減少しているとみられる。

③ 遍路目的の推移

表10より、遍路の目的として最も選択されているものは、2015 年まで「先祖・死者の供養」であったが、2016 年は「祈願(大願成就)」になっている。「祈願(大願成就)」は、2006 年においては11 ある遍路目的の選択肢のうち4 番目であったが、2007 年から「精神修養」より多く選択されて3 番目となり、その後2015 年まで3 番目であったが、2016 年において「先祖・死者の供養」と「健康のため」より多く選択されて1 番目となった。この10 年間で徐々に「祈願(大願成就)」を選択する人が増えており、このような傾向を示している遍路目的は他に見当たらない。2016 年は2006 年の倍の比率になっている。いくつ選択してもよい多重回答方式であるので、「先祖・死者の供養」や「健康のため」は、「祈願(大願成就)」が増えてもその分減少しているというわけではなく、毎回高い比率で選択されている。

次いで調査を重ねるにつれて増加しているものは、「観光」である。「祈願(大願成就)」ほどはっきりした増加傾向ではないが、2006 年～2011 年の選択率より2014 年～2016 年の選択率が高くなっている。「病気の治療」も選択する人がやや少なく増加率も小さいが、この10 年間で増加の傾向を示している。「人との交流」、「自分の生き方と向かい合うため」、「チャレンジ」は、調査を重ねるにつれて次第に増加しているというわけではないが、2006 年及び2007 年より2011 年～2016 年の方が多くなっており、微増傾向にあるとみられる。

表 10 遍路の目的（多重回答）

	2006 年	2007 年	2011 年	2014 年	2015 年	2016 年
先祖・死者の供養	39.3%(181)	33.8%(200)	42.0%(207)	40.1%(477)	36.4%(442)	34.0%(403)
信仰	14.3%(66)	12.8%(76)	13.4%(66)	13.7%(163)	12.4%(151)	10.7%(127)
祈願(大願成就)	18.0%(83)	24.8%(147)	26.4%(130)	28.2%(335)	30.4%(369)	36.7%(434)
精神修養	22.1%(102)	14.2%(84)	25.4%(125)	16.9%(201)	18.9%(229)	18.9%(224)
病気の治療	5.6%(26)	8.1%(48)	7.9%(39)	10.7%(127)	10.8%(131)	10.8%(128)
観光	8.7%(40)	12.3%(73)	12.2%(60)	13.9%(166)	18.3%(222)	15.7%(186)
健康のため	31.0%(143)	25.3%(150)	32.5%(160)	32.1%(382)	32.4%(393)	31.4%(372)
人との交流	7.6%(35)	3.7%(22)	12.4%(61)	10.6%(126)	8.2%(100)	8.4%(99)
自分の生き方と向かい合うため	14.1%(65)	7.9%(47)	20.7%(102)	18.2%(217)	17.1%(207)	15.8%(187)
悩みから自分を解放したい	3.0%(14)	1.5%(9)	4.3%(21)	3.4%(41)	3.9%(47)	4.2%(50)
チャレンジ	9.1%(42)	4.1%(24)	12.8%(63)	11.5%(137)	12.7%(154)	11.8%(140)

調査を重ねるにつれて増加している「祈願（大願成就）」と「観光」について、それがどのような年代と関連しているか、年代別に出してみたのが表 11 と表 12 である。「祈願（大願成就）」において、調査を重ねるにつれて比率が確実に増加している世代は 50 代である。2006 年の 25.5% から 2016 年の 41.4% まで増加している。40 代においても、2015 年を除いて次第に増加する傾向がうかがえ、2016 年では 48.2%92 人の人が「祈願（大願成就）」を選択している。60 代においても 40 代 50 代が示すような大きな伸びではないが、2015 年を除いて増加の傾向を示している。2016 年は 30 代から 60 代まで、これまでの年より増える傾向を示している、現代の遍路目的として「祈願（大願成就）」が多いことを示している。

表 11 年代別「祈願（大願成就）」を選択した人の比率

	2006 年	2007 年	2011 年	2014 年	2015 年	2016 年
10 代	66.7%(2)	40.0%(2)	36.4%(4)	0%(0)	46.7%(7)	50.0%(4)
20 代	9.5%(2)	17.6%(6)	40.7%(11)	27.9%(12)	37.7%(23)	36.5%(19)
30 代	33.3%(5)	35.1%(13)	29.6%(8)	29.2%(19)	35.2%(43)	47.5%(47)
40 代	9.1%(1)	22.7%(10)	28.9%(11)	34.0%(33)	28.9%(48)	48.2%(92)
50 代	25.5%(13)	28.1%(36)	29.3%(22)	31.3%(63)	38.6%(90)	41.4%(122)
60 代	16.1%(34)	23.5%(48)	24.1%(52)	27.3%(129)	25.7%(105)	29.1%(110)
70 代以上	17.5%(25)	26.9%(32)	22.2%(22)	26.2%(79)	26.0%(52)	24.7%(38)

納め札には自分の願い事を墨書きしたり「願意」として願いの言葉を書く欄があるものが多かった。しかし今日市販されている納め札にはそのような欄のないものがよく販売されている。従って、氏名、年齢、住所、年月日のみ書くこととなるが、筆者が実際に札所霊場に参って納め札を入れる際に納め札入れの中をのぞいてみると、納め札の裏面に祈願の言葉を書いているものがいくつもあった。この納め札に願い事を書くのは、遍路目的として祈願があることを具体的に示しており、調査の結果が示すように、「祈願（大願成就）」が中年層を中心に増加している。

表 12 年代別「観光」を選択した人の比率

	2006 年	2007 年	2011 年	2014 年	2015 年	2016 年
10 代	33.3%(1)	20.0%(1)	18.2%(2)	0%(0)	20.0%(3)	25.0%(2)
20 代	28.6%(6)	17.6%(6)	37.0%(10)	32.6%(14)	34.4%(21)	48.1%(25)
30 代	20.0%(3)	18.9%(7)	33.3%(9)	35.4%(23)	24.6%(30)	28.3%(28)
40 代	0%(0)	11.4%(5)	10.5%(4)	23.7%(23)	24.7%(41)	18.8%(36)
50 代	7.8%(4)	14.1%(18)	17.3%(13)	17.4%(35)	20.3%(47)	16.3%(48)
60 代	8.1%(17)	13.2%(27)	8.3%(18)	10.4%(49)	14.2%(58)	9.5%(36)
70 代以上	6.3%(9)	6.7%(8)	4.0%(4)	7.3%(22)	11.0%(22)	7.1%(11)

「観光」について、年度ごとに年代別でどれだけ選択しているかを見てみると、10 代は人数があまりに少ないので除外して、20 代 30 代に選択する人が最も多く、年代が上がるにつれて選択する人が少なくなる傾向

が2011年から2016年においてうかがえる。40代、50代の中年層において年度が進むにつれて「観光」の選択が増加する傾向が2015年まで見られたが、2016年ではやや減っている。20代30代では2016年に多く選択されているので、若い人を中心に「観光」が選ばれる傾向が出ている。

④ 遍路回数について

A 納め札の色による遍路者比率

「今回の遍路は初めてですか、それとも何周目（何回目）ですか」と遍路した回数を2014年よりたずねている。遍路回数が多い人はどの程度いるのか、納め札の色による区分ではどのようなものか見てみる。

表13 納め札の色による遍路者比率

納め札の色 巡拝回数	2014年	2015年	2016年	3年の合計
白 0～4回	82.1%(954)	86.1%(1038)	87.9%(1027)	85.4%(3019)
緑 5～7回	5.1%(59)	4.9%(59)	3.9%(45)	4.6%(163)
赤 8～24回	7.8%(91)	6.6%(80)	4.8%(56)	6.4%(227)
銀 25～49回	3.0%(35)	1.5%(18)	1.5%(18)	2.9%(71)
金 50～99回	1.3%(15)	0.6%(7)	1.5%(17)	1.1%(39)
錦 100回以上以上	0.7%(8)	0.3%(4)	0.4%(5)	0.5%(17)

四国遍路では、何回巡拝したかによって納め札の色が決められている。現在では巡拝回数1～4回が白、5～7回が緑、8～24回が赤、25～49回が銀、50～99回が金、100回以上が錦となっている。ただし、納め札の色による巡拝回数の区分は、時代によってさまざまであることが指摘されている(2)。現在の分類に従って分けてみると、3年間の合計では、白札の人が85.4%、緑札の人が4.6%、赤札の人が6.4%、銀が2.0%、金が1.1%、錦が0.5%となっている。3年間の変化では、白札の人が増え、その分緑、赤、銀の札の人が減っている。実人数でも減っている。金や錦の札の人は非常に少ないが、減っているようには見えない。このように白札を納め札とするはじめて巡る人から4回の人までが、四国遍路では多数を占めている。

B 遍路回数別に見た遍路目的やその他の質問

遍路をはじめてするかあるいは何回も巡っているかで、お遍路さんの意識や状態も違っているであろう。そこで、遍路回数で分けて調べてみた。納め札の色による区分によると、銀、金、錦の人たちは遍路回数25回以上であり、当然のことながらそれだけ巡拝できる人は非常に少なく、全体の3.5%である。そのため、ここでの考察では人数があまり偏らないように遍路回数で分けたグループが100人以上となるように、1回目、2回目、3回目、4～9回目、10回目以上と5つのグループに分類し、3回の調査の合算について見ていくこととする。

表14より、四国遍路をするのが初めての人、2014年は47.4%、2015年は54.6%、2016年は53.9%で、3年間の合算すると52.1%で、約半数の人がはじめて遍路する人である。逆に半数近くの人、すでに88ヶ所を1度以上回ったことのある人たちだということになり、繰り返し回る人が多いことを示している。何度も遍路する人は多くおり、3年間の調査を合わせて2回目と3回目の人は25%で4人に1人、10回目以上の人は325人で回答者の9.2%であった。

表14 遍路回数で分けた5つのグループの比率と人数

	2014年	2015年	2016年	3年の合計
1回目	47.4%(551)	54.6%(659)	53.9%(630)	52.0%(1840)
2回目	16.4%(190)	14.6%(176)	17.8%(208)	16.2%(574)
3回目	9.6%(112)	9.0%(108)	7.8%(91)	8.8%(311)
4～9回目	14.7%(171)	14.1%(169)	12.5%(146)	13.7%(486)
10回目以上	11.9%(138)	7.8%(94)	8.0%(93)	9.2%(325)
計	1162	1206	1168	3536

表15は、遍路回数に分けて、5種の遍路目的とその他の質問の選択率を示したものである。遍路回数が増えるにつれて選択される比率が高くなっているのは、「先祖死者の供養」と「信仰」である。特に「先祖・死者の供養」は、「4～9回目」と「10回目以上」において半数近くになっている。巡る回数が増えるにつれて少しずつ選択する人が増えている「信仰」と対照的に、逆の傾向を示しているのが、「観光」である。「観

光」は遍路回数を重ねるにつれて選択する人が少しずつ減り、「10 回以上」では 4.7% とごく少なくなっている。何度も訪れておりもはや観光の意識はないということだろう。他に回数を重ねるごとに減っているのは、「自分の生き方と向かい合うため」と「チャレンジ」である。どちらも巡拝回数とともに遍路の目的として意識されなくなっていくのであろう。大きな傾向として、遍路回数を重ねるにつれて、「観光」から「信仰」に変わっていくのがうかがえる。その他の遍路目的は、遍路回数で一定の傾向は見られなかった。

表 15 の遍路目的以外の質問について見てみると、「般若心経を必ず唱える」では、1 回目の人でもほぼ 6 割の人が選択し、巡る回数が増えるにつれてさらに選択する人が増え、10 回目以上の人では、9 割以上の人を選択している。般若心経を唱えることは、四国遍路をする上で重要な巡拝作法となっていくのであろう。

死後の世界があるという考えも、遍路回数が増えるにつれて、その考えに賛成する人が増えている。10 回目以上の人では、85% の人が「死後の世界がある」という考えに賛同している。

世界遺産にしたいかどうかでは、遍路回数と関連はなさそうである。その差はわずかであるが、10 回以上の人是最も低くなっていて、遍路経験の多い人に世界遺産を望まない人がいるようである。

表 15 遍路回数別の 5 種の遍路目的とその他の質問 (2014 年、2015 年、2016 年の合計)

	1 回目	2 回目	3 回目	4～9 回目	10 回目以上
先祖・死者の供養	32.0% (588)	36.5% (209)	38.6% (120)	50.0% (236)	48.4% (156)
信仰	9.6% (176)	12.4% (71)	13.5% (42)	14.7% (71)	23.0% (74)
観光	21.5% (395)	14.7% (84)	11.6% (36)	7.9% (38)	4.7% (15)
自分の生き方と向かい合うため	18.6% (342)	15.6% (89)	14.8% (46)	17.2% (83)	13.0% (42)
チャレンジ	15.7% (288)	9.6% (55)	8.7% (27)	7.1% (34)	5.6% (18)
般若心経を必ず唱える	60.6% (1111)	75.0% (430)	80.0% (248)	86.6% (419)	92.5% (298)
死後の世界あると思う	71.3% (1190)	71.9% (365)	75.1% (211)	76.6% (330)	85.0% (250)
世界遺産にしたい	82.0% (1441)	82.1% (455)	81.7% (241)	84.3% (382)	77.6% (235)

⑤ マスメディアの影響

2015 年の調査において、遍路目的のその他の欄にこれまでにないことが書かれている質問紙があった。それは自由記入欄に「水曜どうでしょう」と書かれていたものである。また、調査実施中に繁多寺の山門前で他のお遍路さんとは異なるポーズを取ったり、境内を走りそれをビデオに撮る人たちがいた。

「水曜どうでしょう」は北海道テレビ放送 (HTB) 制作のバラエティ深夜番組のことである。通称は「どうでしょう」や「水どう」と言われる。大泉洋をメインキャストとして、旅を中心としたさまざまな企画を行い、その中に四国遍路を巡るものがあつた。1999 年、2000 年、2002 年と 3 回四国遍路を行ってそれが放送され、全国で何度も再放送され、DVD も発売されている。

その番組をまねて、大泉らと同じ行動をしようとした者が四国遍路を巡り、繁多寺の山門前でポーズを取ったり境内を走ってビデオに撮ったりしたわけである。2015 年の調査では、5 人の人がアンケートの遍路目的に「水曜どうでしょう」と記入していたが、おそらく、アンケートを拒否した者や「水曜どうでしょう」と書いていない者もいたであろうから、もっと多くの人が「水曜どうでしょう」にかかわって札所を巡っているのではないかと推測される。彼らの行動も広義には四国遍路をしている者の中に含まれる。スタンプラリーのつもりで四国遍路をしている人との区別はつけられないであろう。また、札所を巡っても納経せずカメラで自撮りして証拠写真とする者もいる。彼らの中には、巡っているうちに遍路の魅力にみせられて本格的に四国遍路しようと思う者もいるであろう。

遍路をはじめる目的は本調査で示されているように非常に多様であり、彼らのような場合もあり得てであろう。また、他の巡礼、たとえばスペインのサンチャゴ巡礼には異教徒や無宗教者も参加しており、そうした人たちと共通していると考えられるであろう。

アンケートに記入された回答を見ると、出身は、北海道、群馬 (2 人)、新潟、愛知で、5 人とも般若心経は唱えないと回答しているが、20 代の 3 人は歩き遍路をしたいと回答しており、「水曜どうでしょう」の番組に触発された彼ら流儀の巡礼から、本格的な四国遍路へと入っていく可能性は十分あると思われる。人気深夜番組をきっかけとして遍路をはじめる場合もあり、現代の四国遍路はさまざまな様相を呈している。

3 むすびにかえて

4回実施した遍路する人々への目視調査では、札所を巡拝する人も車も日々の変動が大きいことがまず注目される。実施年度では人も車も2011年に比べて2014年以降が大幅に増加している。特に自動車数において倍増している。

2006年から2016年に6回実施した質問紙調査による回答比率の変化を見てみると、次のような傾向が見られた。

1. 遍路する人の年代は、60代以上が2006年では77.8%であったのが2016年では45.3%と減少し、その分中年層（40代50代）が2006年の13.6%から2016年の41.2%へと増加傾向にある。
2. 自家用車は大幅に増える傾向を示している。2016年は遍路する人の75.2%が自家用車であった。歩き遍路は相対的に比率を下げているが実人数は一定している。
3. 通し遍路をする人は減る傾向にある。2006年の32.8%から2016年の12.3%へと減少している。
4. 遍路目的は、「先祖・死者の供養」、「健康のため」、「祈願（大願成就）」、「精神修養」の順にほぼ選択されていたが、「祈願（大願成就）」がこの10年で少しずつ増加し、2016年では「先祖・死者の供養」と「健康のため」よりも多く選択されるに至った。
5. 遍路回数別に見てみると、遍路回数の多い人ほど「先祖・死者の供養」「信仰」「般若心経を必ず唱える」「死後の世界あると思う意見に賛成」を選ぶ傾向があった。
6. テレビ番組「水曜どうでしょう」の影響を受けて四国遍路をする人がおり、マスメディアの影響は大きいと考えられる。

これらの傾向をみてみると、現代の四国遍路について宗教の私事化がみられる。岡本亮輔によると（3）、宗教の私事化とは、宗教が政治や教育といった公的な領域から徐々に排除されて、個々人がプライベートにかかわる対象となることである。そして、宗教の私事化は、大きく分けて2つの状況を指しているという。

1つは宗教が公的な世界の中心に位置づけられ、社会全体の世界観・価値観を支配していた前近代的な状況から、私的な領域に囲い込まれていくことを意味している。もう1つは私的な領域に囲い込まれた宗教が、元々の歴史や教義とは無関係に、個々人が特定の要素だけを選び取って、自己流にカスタマイズされた私的な信仰が増えていくのである。

これまでの調査データの結果より、宗教の私事化を示すものとして以下の特徴をあげることができる。

1. 各人の時間的制約や体力に合わせた、通し遍路から区切り遍路の増加
2. 一律の行動をする団体バスからより自由な自家用車へ
3. 現世利益や現代的快楽を求める現実主義としての「祈願（大願成就）」と「観光」目的の増加
4. テレビ番組に倣って札所を巡る人がいる

このように四国遍路をするにあたって、自己流に都合よく変形した巡拝を行おうとする志向が見られる。しかし、全く私的な巡拝になるのかといえばそうではない。四国遍路の作法に従って巡拝する人は多い。難解とされる般若心経を唱えることについて、四国遍路が初めての人でも6割の人が必ず唱えると回答している。さらに巡拝を続けることによって、死後の世界はあるという意見に賛同する人の比率が増え、遍路目的のうち「先祖・死者の供養」と「信仰」を選択する人の比率が増えている。そのことから精神的内面化への収斂が見られる。その際の規範となるのが弘法大師信仰である。大石雅章は、弘法大師信仰を「修行を達成した空海が四国遍路を巡る修行者を支え、見守る思想」だとしているが（4）、そのような思想に共感し、自己の霊性を深めていく巡拝者が多く見られる。多様化とともに、単なる画一化ではなく弘法大師信仰への内面化のみられることが今日の四国遍路の傾向であろう。

（注1）早稲田大学道空間研究所『四国遍路と遍路道に関する意識調査』報告書1997年10月、33頁。

（注2）愛媛県生涯学習センター『四国遍路のあゆみ』2001年。

（注3）岡本亮輔、『聖地巡礼 世界遺産からアニメの舞台まで』、中央公論新社、2015年、16-7頁。

（注4）大石雅章「四国遍路と弘法大師信仰」『四国遍路と世界の巡礼』第1号、2016年、11頁。